

「木版画のとりこになった！」

—版画展始末記—

高村 袈裟茂

教室に入って

非常勤を含めて全ての仕事を終え、さて、これから何を始めようかと考えていた頃ふと目に留まったのが、神田の老舗・文房堂のアートスクールのパンフレットでした。木版画はこれまでの年賀状作りで無縁ではなかったし、月に2回都心の教室に通うのは田舎暮らしの身に「社会の窓」を開ける意味でも格好と思われたのです。こうして、美術オンチの70の手習いが始まりました。

木版画の作成は、絵を描き、版木を彫り、摺り上げる、の三つのプロセスから成り立ちます。よく知られているように江戸以来の浮世絵は、絵師、彫師、摺師の三者の分業で出来上がっていました。現代では、棟方志功に代表される創作版画と、浮世絵の流れを受け継ぐものに大別されるようです。

美術センスに欠ける私は、絵画の勉強から始めるのは到底無理と考えました。

そこで専ら彫りと摺りを学ぶことにしたのです。

木版画を学ぶ

教室ではプロの版画家による指導で基



版画展会場 銀座 新井画廊

礎から学びます。最初は、題材を用いて基本的な技術指導、あとは自由で随時指導というかたちです。自己流で賀状作りをしていた私には、いつも「目から鱗」といった新鮮な驚きと、さすがはプロ、と感じることの毎日でした。

まず、版画の原点となる「元絵」。これを彫るための線画にして版木に写します。この場合絵の色彩に従って描き分けます。多色摺りの場合、8枚から10枚程度の版木になります。昔の版木は桜・朴材の無垢材が主でしたが、今はほとんどシナノキのベニヤ板を用います。元絵を版木に写し取る方法。これはまったくの驚きでした。コピーした絵をシンナーによって版木にコピーするのです。この方法を用いれば何枚でも寸違わぬ絵が版木に写すことが出来ます。

版木の準備ができればはいよいよ「彫り」にはいります。版木刀、丸刀、平刀、三角刀など大小さまざまな彫刻刀を駆使して彫りすすめるのは、忘我といった感じ

の楽しい時間です。美人画の髪の毛などの極細の線、ボカシを入れる彫りなどさまざまな技巧を、先生の指導さらには自分なりに工夫することが求められます。この彫りに関して重要なことに「見当付け」があります。多色摺り木版画にとって摺りにズレを生じさせないことが絶対に必要です。このために版木上に3か所の見当を付けます。

摺りは木版画の仕上げの工程であり、これによって作品の良しあしが決まります。色の選択、濃淡、ほかし、糊の使いかたのそれぞれにさまざまな手法、センスが要求されます。版木に絵の具と糊を乗せ、刷毛、ブラシで伸ばして、ズレを起かさないように紙を見当に合わせ、上からバレンをあてます。紙のズレの許容範囲は上下左右コンマ1ミリ以下であり、バレンの力加減で色のグラデーションが決まるなど、摺りは最も緊張・集中力の持続が要求されるプロセスです。17〜8回の摺りの作業の最終段階でミスをして悔しい思いをすることもよくあります。集中力を切らして、天地逆さまに摺ってしまったなんて信じられないミスを犯すことさえありました。

三人展開催へ

教室のメンバーは15人程度、おおむね定年後の趣味仲間、和気あいあいとした雰囲気を楽しんでいます。今では、私が最年長になっていますが、この歳になって新しい友達作りができることを幸せ

と思つています。

放課後は現役時代と同様に「類は友」呑んべい仲間連れだつて居酒屋へ。飲むほどに意気があがつて技術論、芸術論に花を咲かせることになりました。

そうした月日の続いた昨年の秋、メートルの上がつた三人はグループ展を開こうという話になり、さらに発展して「開くなら銀座で」ということになったのです。そうなるも騎虎の勢い、話は現実のものとなって教室の先生の支援も受けて画廊探しとなりました。結果、呑み助の好みというべきか、ビヤホールの老舗銀座ライオンの裏手に位置する新井画廊で「木版画 三人展」3月開催ということに決まったのです。

展示会が現実のものとなって、準備が進んでいく頃には不安と悔恨に苛まれる

ことになりました。それは、私にとっての

木版画は趣味の範疇のもので、公の場にだすようなレベルのものではないことを自分自身が最もよく承知していることなのです。しかし、期日が迫つてきては最早逃げることもできないと覚悟を決めました。年が改まって、年来の友人たちに展示会開催案内のハガキに次の一文を付けて郵送しました。

《さて、本日「木版画 三人展」のご案内をさせていただきます。私は長らく自己流の木版画年賀状作りをしてまいりましたが、70の手習いで木版画教室に入りました10年近くなります。この教室の飲み仲間と飲んでいううちに気分が高揚してきてこういうことになってしまいました。もとより、私の作品はあまりにも稚拙なもの、展示場などで皆様のお目



曼荼羅・聖観音菩薩

これまで親しくお付き合いをさせていただいた皆様

がたと年賀状の交換だけでお目にかかることもないままに長い年月を過ごしてきたことを、いつも残念に思つておりました。

こうした思いから、私の今を生きている証としての木版画をご覧いただき、「二期一会」としてお目にかかることができればこれ以上よろこびはありません。

季節は春のお彼岸、場所は厚くましくも銀座七丁目、お暇がございましたら久しぶりの銀ブラを楽しみながらお出かけください。》

三人展が終わって

期待と不安の交錯するなかで迎えた展

示会でしたが、期間中300人を超える

来廊者に賑わう盛況ぶりになりました。そして、その大半は昔の職場仲間のみなさんだったのです。職場を離れて以来20年振り、30年振りという友達に数多く会うことができました。なかでも、私が東京オリンピック組織委員会の職員として相模湖選手村の運営にあたっていた当時、通訳として協力してくれていたフランス大使館勤務の女性と50年振りに再会したことは感動的でした。こうした思いもよらぬ多くの温かい友情の輪のなかで望外の喜び、幸福感に満ちた1週間でした。文字通り一期一会の出会いの連続に感激しながらも、あまりの忙しさのなかでその一人ひとりの友と充分な語らひの時間を持つことができなかったことが申し訳なかつたと心残りに思っています。これを機会にまた新たな出会いの場を作つてゆくことができれば幸いです。

今回は、私の喜寿を機会にという意味もこめての催しでしたが、これで老い込むことなく一層木版画に精進しつづつ元気に過ごしたいと思つています。また、菜園では野菜たちが私の出を待っていますし、地域の囲碁クラブ、ゴルフ仲間にも大分ご無沙汰が続いています。今年度は忙しい春です。

日本と世界のある夕日

(元労働経済局長)

